



風

石合 力

カイロから

地中海に面するエジプト北部の都市アレクサンドリアは、ムルシ政権を支える穏健イスラム組織、ムスリム同胞団の拠点として知られる。ここで信仰心のあつい家庭に育ったマハムド・ハッサンさん(28)が同胞団に加わったのは高校最後の年だった。ムバラク前政権下で同胞団は非法組織だったが「60人の同級生のうち、約20人が団員。教師にも多かった」という。

メンバーは、「家族」と呼ばれる最小単位のグループに所属する。近所に住む同年代の仲間5人だった。

モスクでの月一度の徹夜礼拝、複数の「家族」が集まるキャンプ、パレスチナ支援デモ……。すべて「家族」と一緒に行動した。まるで、村上春樹の新作「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の

ムスリム同胞団 色彩を持ちすぎた男のその後

年」に出てくる主人公ら5人のグループのように。ただし、全員が男性だった。

「次第に自分の人間関係の100%が同胞団になった」

ハッサンさんによると、最初の1年はシンパ(支持者)で、その後サポーター(支援者)に昇格する資格を得る。支援者として3年以上たつと初めて団員になれる。団員は、自分の収入の8%を組織に寄付する。ランクが上がるごとに理想的な同胞団員ができあがっていく仕組みだ。

ところが、あるとき、自分がほかのメンバーと違うことに気づく。「家族」のうち、自分だけが支援者に昇格できなかったのだ。

思い当たる節があった。音楽をハラーム(忌避すべきもの)とする教えに対し、「なぜ音楽がハラームなのか、理解できない」と疑問を投げかけていた。著名な女性歌手フアイルーズの歌を聴いたら、とても美しかったからだ。

審査する幹部はこう言った。「君の問題は、自分の意見を表に出しすぎることだ」

色彩を持ちすぎたハッサンさんに居場所はなかった。大学卒業直後、自らの意思で脱会した。それは裏切りを意味した。「神はおまえのウソを許さない」。かつての仲間

は、ネット上で罵倒してきた。フェイスブックで彼らを次々とアンフレンド(友達関係を解除)した。残った友人は脱会者の2人だけだった。自宅で失意の5年間を過ごした後、決意する。「友人関係も仕事も、一から作り直す」。いま、カイロを拠点に映像ドキュメンタリー作家、ジャーナリストとして発信するハッサンさんは言う。「服従を求める同胞団という組織に40年以上もいたムルシ氏は、機械の歯車にすぎない。洞察力など持ちようがない」

同胞団は政治に関与すべきではないとの立場から、同胞団を離れて大統領選に立候補した元幹部アブルフトゥーハ氏も「イスラムによる解決」を掲げるムルシ氏をこう批判する。「イスラムの教えは、解決策の詳細にまで踏み込まない。どう解決するかは我々(人間)のすることだ。イスラムが求めているのはスローガンではなく行動なのだ」

私がカイロに赴任した直後に起きたエジプト民衆革命はソーシャルネットワークの動員力から、フェイスブック革命とも呼ばれた。2年半がたち離任する今、タハリール広場にあふれた連帯の熱気は消え失せた。経済と治安が悪化するなか、政権と国民の「アンフレンド化」が進む。「アラブの春」の真の勝者はだれか。穏健イスラム勢力だと結論づけるのは、早すぎる気がしてならない。(国際報道部長、前中東アフリカ総局長)

ツイッターでつぶやいています。@TsutomuISIAI